社会部会（小学校）

| 県研究主題 |
| --- |
| 社会的な見方や考え方を養い、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善 |

提案１　　提案者　添田　士郎（中地区）

| ＜研究主題＞ |
| --- |
| 地域の特性を生かして、表現する力を育てる授業づくり |

１　提案内容

（１）　主題設定の理由

自分の住む地域を教材として学習を進めることは、地域社会の一員としての意識が深まり、よりよい社会の形成に参画する資質が養われると考えられる。さらに、地域や実社会から教材を得ることによって学習意欲の向上が期待されるであろう。地域の特性を生かす地域教材は、児童と社会的な事象とをつなげる有効な教材であると考える。

（２）　提案内容

身近な地域にある具体的な事柄を取り上げて学習していくことは、次の点で児童の学びにとって有効である。

①問題解決学習を構成しやすく、『アクティブ・ラーニング』の場を設定しやすいこと

②教材を訪ねることができ、それを五感で感じることができること

③教材に繰り返しふれることができること

④教材を通して、地域の人の生きざまにふれることができること

本実践における研究テーマに迫るための手立てとして、地域の特性を生かした教材を考えた。

地域の特性を生かすために、「かなテクカレッジ西部」（職業訓練技術校）の見学や、機械加工・溶接板金・自動車整備の工程を見学し、児童の自動車工業に対する興味・関心を高め、各工場の関連や相違点について着目させながら進めることにした。

また、市の施策である交通スリム化教育を取り上げ、児童・保護者への事前・事後アンケートを実施して交通利用意識のきっかけをつくり、次時につながる手立てとした。西地区にある日産車体秦野事業所では、毎年 11 月に『游 more！秦野』という体験型のイベントが開催されるが、普段入ることができない実験設備やプレス工場の公開、テストコース同乗体験は、児童に興味・関心をもたせるきっかけとなった。

本学級は、地域の工場で働いている保護者も多く、児童が身近なところから意見を聞きやすい。今回も約８割の保護者から、アンケートを含め様々な回答を得ることができた。

表現する力を育てる手立ての１つとして、小グループの話し合いと発表を行い、多様な考えを交流させ、各自の考えを共有できるようにした。書画カメラの提示とミニホワイトボードの活用は、個人やグループの考えをまとめやすく、また全体の様々な意見の交流にも活用できた。発表会に際しての環境やツールの工夫も、授業づくりには大変有効だったと思われる。

２　協議内容

（１）　生産者との関わりについて

計画当初は見学を予定していたが、事情により変更した。メールで児童の疑問や質問に的確に答えていくいただくことで児童の課題に対する意識は高まった。しかし、実際に学校訪問しても

らい、生産者と児童とが、直接話し合いを行ったほうが、ツーウエイのやりとりができて効果的だったと思われる。

（2）　児童が考える夢の車について

夢の車を生産者・消費者の両方の視点で考えることで、消費者の願いや生産者の工夫、努力を知ることができ、より焦点を絞った学習になった。「乗ってみたい車」と「実現できる車」という視点で考えさせることも有効であったかもしれない。自動車作りに込められた願いや工夫を浮き彫りにできる単元構成がさらに求められる。

（3）　地域教材の活用

「かなテクカレッジ」は、市内の他の学校も見学しており、本校の教員は毎年見学を行っている。児童自身が、身近なものづくりを実際に見学することは、大変貴重な体験である。見学地によっては、一人ひとりがコマ（mm 単位）をもらうことができ、工業生産の初歩的な事象を知るきっかけともなっている。自動車整備工場では、自動車を再生する工程も見学することができ、単元を進めるうえで有効であった。その他にも関連部品工場はいくつかあるが、時間的に見学することが難しいのが実情である。

3　助言

教科書に提示されている地域の教材は、興味関心を持ちにくい。身近な地域の教材をアレンジし単元をどのようにつくっていくかが教員の指導ポイントになる。学習指導要領には、社会的事象の意味について考えることも明記されており、教員による学習活動の工夫が、社会的な見方、課題解決的な視点を児童に持たせ、課題を解決していく力を養っていくことにつながる。

学習が進行するにつれて、児童が課題に対して新たな気付きを持ち、思考していく姿を、教員が見通すことができるようなマネジメントをしていくことで、児童の課題解決能力の向上につながる。

言語活動の基礎は、国語科をはじめ、他教科でも積極的に活用することが重要である。教員の提示した資料をもとに、事実に基づいた思考をさらに一歩深めることもできる。今回行ったペアやグループ学習は、あくまでも手段であり目的ではない。

主体的に参画することや社会的事象の見方が、社会科における課題解決につながると考える。本日の提案をもとに、各市町村で組織的、系統的に社会科の実践を積み上げていければよいと考えている。

4　まとめ

研究授業・研究提案とは、様々な意見を聞きながら新たな発見やアイデアが数多く出される場である。教員が、話し合いを通して、お互いに多様な意見を認め、実感し、考えを共有できることが第一である。「社会に開かれた教育課程」がこれから大切なものになっていくが、その１つは地域教材や人的教材である。各校のカリキュラム・マネージメントを見直し、さらに、地域教材や人的教材をどのように自校に取り入れていくかが教員の知恵の出しどころである。また、教材との出会いをもとに児童にどのような力を付けさせるのかがポイントであって、教材との出会いで終わってはならない。単元学習を通して、身に付けさせたい力とは何かを明確にするためにも、児童には視点をもって見学させたい。

１つの社会的事象を通して、時間軸・空間軸を踏まえ、人間的なつながりを考える学びこそ社会科で意識したい項目の１つである。疑問・直感から得られる児童の思考をもとに、教員が単元構想を作成し、つくり上げていくことによって、児童に大きな変容が見られることを今回の提案が示している。

提案２　　提案者　武田　直行（相模原地区）

＜研究主題＞
学習問題を「自分ごと」としつつ、社会的な見方や考え方を養う学習指導を目指して
～資料を読み取り、比較・関連づけ・統合することを通して、社会的事象の意味について考え、表現する学習活動と評価を考える～

１　提案内容

（１）テーマ設定の理由

より身近な問題として興味や関心をもつこと、その時代の人物が取り組んだことに対して「共感的に理解できるようにすること」（『学習指導要領解説』Ｐ７０）が、学習問題を「自分ごと」にするということだと考える。

つまり、学習問題について「調べたくて仕方がない」という気持ちになって、授業以外でも自発的に学習を進めるといった行動に移したり、「自分だったらこうだろうな」と自分に投影させて考えたりするようになることが、学習問題を「自分ごと」にするということだと考える。

６年生の社会科で扱う内容は、大昔のことや国全体に関わること、世界に関わることなど、ともすれば自分の生活や身の回りのこととはかけ離れたようなものもある。しかし、そういった内容をいかに「自分ごと」となるように教材の提示などを工夫していくかが大切になるのではないか。

学習内容が「自分ごと」になることで、児童が能動的に学習し、いろいろな考えももてるようになると考えた。

２　テーマに迫るための手立て

（１）学習問題を身近・大切な問題として関心をもたせる

忠魂碑や焼夷弾、火たたきや陶製手りゅう弾など、地域にあるものや当時使われていた物を見たり手に取ったりすることで、戦争をより身近なこととしてとらえられるようにしたいと考えた。また、地域の戦争体験者の方から話を聞いたり、その手記を読んだりするようにした。時代や出来事のスケールという視点からも、児童の生活とはかけ離れた『戦争』を、いかに身近なものにしていくか。この工夫が大切になる。

（２）社会的事象の意味について考える力を付ける

社会的事象の意味について考える力を付けるためには、まず教員が、各単元における社会的事象を明確にする必要がある。本単元における社会的事象を次の２つと考えた。

①明治維新において「富国強兵」政策のもと進んできた日本が、貧困に直面し、その改善を目指して戦争へと発展していったこと

②アジア・太平洋へと戦線を拡大する中で、国内外において多くの命が犠牲になったこと（戦争による加害と被害）

以上２点をより広い視野でとらえ、少しでも深く考えられるようにした。

（３）考えたことを意見文にして発信する

調べて感じたことや考えたことをみんなに発信するために、国語科の単元「意見を聞き合って考えを深め、意見文を書こう」の意見文の書き方を取り入れた。「ナビ」というレポートとしてまとめていく形をとった。

３　実践の成果（○）と課題（●）

○忠魂碑という地域素材を通して、「自分ごと」とすることができた。自分たちの地域にも歴史に残る

戦争に行った人がいること。ましてやそれが自分の先祖だったり友達の先祖だったりすることには、大きな驚きを受けていた。

〇博物館から借りた貝殻と木で作ったスプーンや陶製の手りゅう弾などを実際に手に取ることで、戦時下の生活を「自分ごと」として考えることができた。

●児童の思考が学習の前後でどのように変化したかを見取る手立てが不足していた。思考の連続性を意識して計画的に思考を見取るようにすることで、児童の考え方の変容がより明確にとらえることができるのではないか。

●資料から読み取ったことを考え、書く作業に多くの時間を費やした。今後は自分の考えだけでなく、お互いの考えを共有したり検証したりする時間をきちんと確保し、考えを深めていきたい。

4　協議内容

（1）アクティブ・ラーニングの視点からの話があったが、主体的・対話的で深い学びというのは、たとえば児童の間違った答えをそのままにしたり曖昧にしたりせず、教員が「でも」で投げかけることで、さらなる思考につながるのではないか。

（2）思考力を育むためにはノート指導が大切である。児童一人ひとりの考えを全体に広めることで思考を深めていくことができる。児童全員が発表することは難しいので、教員が児童のノートをしっかりと見取り、意見を取り上げることも必要である。

（3）身近なものから興味をもたせることは、非常に大切なスタートだということが分かった。ただし地域から、日本・世界へと視点を向けさせることも必要だろう。

5　まとめ

・児童を教材とどう出会わせるかが大切である。本授業では「忠魂碑」という身近な素材から広げたことはよい工夫だった。「自分ごと」になるきかっけとなっただろう。また、実物にふれるということや戦争体験者の話を聞くということは、児童にとって、「戦争」という遠い出来事を身近に感じさせるよい手立てだった。

・「自分ごと」というのに対しては、相手の立場に立つということも大事である。客観的に考えること、相手に対して考えることも必要である。（この単元では戦時中の人々の立場）